

初茜展望閣の灯の消され
火の鳥の羽ばたき出でよとんど焚く
スキー抱く一步も列をゆづらじと
母の忌の供華買ひに出し町は春
檻褸の火をふりかざしつゝ土堤を焼く
開きたる絵本の雛の起ちあがり
毛氈に浮き足の立つひゝなかな
ものゝ芽に捨てし煙草の灰となり
手を振るは聞こえぬ返事耕せる
矛先をわれに向けたる木の芽かな
ひしめける顔に吾子あり卒業す
春月にとゞかんとして火の粉消え
犬吠えてわれにかへりし花疲れ
書きかけのペンのころがる朝寝かな

春惜しむ鞆を柵に押しつけて
てのひらに水のしたゝる苗を売る
眼鏡とりはづして眇苗を選る
衝立をとれば煤けし大夏炉
裁ち鋏垣につつこみバラを剪る
音立てゝ閉まる扉に薔薇をどり
新鮮な卵の上の蠅叩
蜘蛛の巣のがんじがらめに常夜灯
前脚をふんばりて蟻立ち止る
白砂糖帽子となりし苺食ぶ

二〇一五年八月二五日